

「創世記を読み終えて」

2021年08月30日

創世記は何回、読んだであろうか。読む度に、人間の罪深さと神の憐れみに新しい発見をする。今回も、創世記の記者たちが伝える信仰を、喜びをもって受け止めることができた。簡略に記した記述から、想像が大きく膨らみ、彼らの精神性の高さに敬服した。

創世記の成立は、捕囚期（紀元前6世紀）頃である。南王国のユダが滅亡し、エルサレム神殿や宗教的組織は壊滅的に崩れ去った。バビロンに捕囚され、民族は信仰の危機を迎えていた。ペルシアによって捕囚から解かれたが、苦難と混乱の中、寄留者と帰還者は民族のアイデンティティを求めて、創世記を編集したと思われる。

大きく二部に分けられる。一部は、天地創造からノア物語までの神話的構成の部分である。最初に天地創造と人間の創造から、書き始めている。彼らは創造主なる神を信じた。その創造は、「極めて良かった」とされる徹底的な「是認」であった。ところが、人は神に反逆し、罪を犯したために、共に生きる愛を失い、悲惨と暴虐に陥った。その悲惨と暴虐を克明に描いている。アダムは神を拒絶し、エバの所為だと言い、エバもまた責任を回避している。二人から生まれた長男カインは弟アベルを殺した。アブラハムから7代目のレメクに至っては、権力の亡者となり、己の力を誇示する以外の道を知らない者になった。神は主の名を呼ぶ別の氏族を起し、増えたが、ノアの時代には地に暴虐が満ちた。神は創造を悔やみ、洪水による世界の滅亡を決意した。この時、神と共に歩むノア一家を救われた。神は、人間の罪を歎きながらも、そこから人間を救う道を用意されている。神は罪ある自分たちを憐れんでくださるという創世記の著者たちの信仰告白である。この告白は、私たちに生きる勇気を与えてくれる。一部において、神は誰であり、人間は何であり、犯してしまう罪の実態を暴き、歴史、自然との関りを描き出している。これらの記述から、主イエスによる罪の赦し、生きることは是認宣言を、感謝を持って思い起こす。

ノアの洪水からの救いから、アブラハム物語へ繋がっていく二部は、アブラハムから始まる族長物語である。族長の起源は紀元前20世紀頃と言われている。創世記の成立まで、千年を遥かに超える年月が経っているが、彼らは伝承によって語り継いで来た。種々の資料を踏まえ、加筆、修正を加え、今日の私たちまで伝えて来た。驚くべきことである。アブラハムはイスラエル人の祖とされ、信仰の父と位置付けられている。そう言われるにふさわしい人物である。祝福の基にするという神の召しに応え、行き先を知らずに旅立った。そこには、神の真実を知りたいという篤い求道、内面からの強い促しがあったからであろう。幾多の挫折、失敗を重ねながら、独り子イサクを得て、神の真実を悟る。与えられたイサクを献げよという神からの命令に淡々と従うアブラハムの信仰は、求道が満たされたことへの応答と言えよう。イサクは、アブラハムへの祝福のゆえに、争いのない温和で満ち足りた生涯を送っている。彼は、美しく、賢い妻リベカに支えられて生きてに違いない。人は皆、イサクのような生涯が与えられることを望むのではないか。イサクの子ヤコブは罪の世を舐め尽くした生涯を送っている。彼ほど、自らの罪と世の罪を体験した人物はいないだろう。それゆえに、彼は神の祝福を慕い求めた。神の祝福なしには生きられないことを知っていたのである。私は彼を信仰の勇者と呼びたい。ヤコブの子ヨセフは、兄弟によって苦難に遭遇したが、神が共にいる祝福を受ける。兄弟の悔い改めを聞き、人間の人生は神の救いに与るために用意されたものであると告白する。族長たちは、波乱万丈の生涯を送っているが、神が共にいる「インマヌエル」を経験している。私たちにも主イエスが共におられる恵みの事実を重ね合わせて読み、神の祝福を感謝する幸いな時を得た。